
IS 書きなぐられた一夏は

貴仁辺人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 書きなぐられた一夏は

【Nコード】

N5357Z

【作者名】

貴仁辺人

【あらすじ】

織斑一夏。女性のみが扱えるはずのパスワードスーツ、インフィニット・ストラトス 通称『IS』を操縦できる、世界でただ一人の男性。姉に、世界一の操縦者と謳われる織斑千冬をもつ。しかし、一夏の目標は決して彼女ではなく？ 原作と違う性格の一夏。目指す方向こそ違えど、信念は変わらない。これは、そんな彼の物語。ある程度の3人称の練習も兼ねているので、気軽に指摘や評価いただけると思います。

1 クラスメイトは全員反論者（前書き）

この間まで、活動報告の方で書いていた二次創作。一夏性格改変ものとなっています。

おまけで書いているものなので亀更新、どう頑張っても同時更新不可能と判断した時点で、こちらは開示設定を「開示しない」に変更すると思います。

1 クラスメイトは全員反論者

これは、どうしたものか。

目の前で光る、名も知らぬISを見つめながら、織斑一夏はそう思った。

分かっている。これは仕掛けられたことなのだろう。でなければ、自分がISに触ったところで、反応するわけがない。仕掛人は恐らく、自分のよく知っている女性だ。それ以外に、この状況を作り出せる人間なんて思いつかない。

IS。インフィニット・ストラトス。宇宙進出を目的として作られた、いや造られた、女性のみが装着できるパワードスーツ。彼が今触って、そして起動させている物体は、そういうシロモノだ。そして、「女性のみが装着できる」という部分がミソである。

何を隠そう、彼こと織斑一夏は、男なのだ。過去に性転換手術を受けたわけでもない、完璧な染色体XYなのである。

男である自分が触ったときに反応するだなんて、ありえないのだ。

第一、前は反応しなかったのだから。

だったら、仕掛けなんてそれごと潰してしまえばいい。少なくとも、今の彼にはそれが可能だ。それも、容易に。

さあ と、一夏がISと向かい合いなにやら意気込んだところで、残念ながら自身への気合いの注入は無駄骨と化す。

それがなぜかと言えば、「その君！ ここは部外者以外立入り」といったように、背後から女性の声が聞こえたためだ。

よく考えれば、さつさとISから手を離していればよかったのではないか。

織斑一夏は自分の失念に今更後悔するも、背後で慌てて関係者と

連絡を取っている女性の声があまりに大きかったせいで、溜息は誰にも聞こえなかった。

とりあえず、今から事情聴取があるんだろうなあ。それならいっそ、このISに乗り込んで逃げ出してしまおうか。ぼんやりと彼が考えていた内容は、余りにも物騒で、しかもはた迷惑なものだった。

それから、IS学園の入学式直後までの間に、一夏が脳に記憶した情報はあまりなかった。

急遽入学が決定したIS学園で、勉強に最低限ついていくために必要な資料。殺人現場で鈍器になりえる分厚さのそのの中身と、後はIS学園で遭遇する可能性が低くはない人々の名前。彼が覚えたのは、大体それだけだ。第一に、ISの基礎知識など彼はほとんど知っていたため、ここ最近新たに開発された武装や理論の大雑把な内容程度しか、彼の頭の肥やしにはならなかったが。

強いて他に覚えたものがあるとすれば、今 教室、初のホームルーム、周りの生徒から向けられる強烈な視線からの不快感ぐらいであろう。とにかく、覚えたのベクトルが違う方向であることは、どうやら間違いない。

とはいえ、たかだかこの程度の不快感なら、彼はとっくに慣れていた。

たとえば、周囲の生徒が自分に集中しすぎているせいで、壇上に立つ緑の髪の小柄な教師が涙目になっていようと、彼は気にするそぶりも見せない。

そうして、やけに殺気立った空気の中、入学祝いの言葉は流れて行く。

その後で、自己紹介なるものが始まった。

早くクラス唯一の男子の番に回したのであるう、早い、早い、「織斑」より若い出席番号（名字が「あ、から、おりむよ、まで」で始まる生徒）達の自己紹介は、1人20秒取っているかすら怪し

いスピードで終わってしまう。

2分もしない間に、自己紹介のローテーションは一夏の番へと変わる。

全方位からの期待の眼差しを受けながら、副担任に呼ばれる前に、一夏は立ち上がった。

「織斑一夏です。2年からの志望は整備科、趣味は機械いじりと議論。得意なことは知り合い曰く勉強、苦手なことは球体型キーボードの操作です。あ、それと、机に突っ伏して寝てたりしたら大体は徹夜後なんで、授業中でも起こさないでいただけると助かります」

予定通りにスラスラと、一夏は自己紹介を終わらせた。カンニングペーパーでも用意していたのではないかとさえ思わせるほど、その説明は流暢で無感動。思わず、場の空気は一瞬静まり返った。

だからだろう。

可能な限り自身のことを丁寧に教えたはずの彼は、突如飛来した出席簿による強烈な一撃を、全く予想することができなかったのだ。教室中に、パンツッ！と大きく音が響く。続けて一夏の頭と机のぶつかるゴツという音が響き、女子達から多少の悲鳴があがった。しかしけろりと一夏は起き上がり、まるで起き上がることを知っていたかのように、攻撃主 織斑千冬は、そのまま言葉を続けた。

「授業中に居眠りする予定を今から作っておくだ？ いいご身分だな」

一夏が振り向くと、そこには自身の姉 織斑千冬が、いた。

「やだなあ織斑先生、言葉のあやですよ。第一、授業中に寝るぐらいいなら、PCの中身を整理でもしますって」

「授業を受ける、授業を」

瞳を閉じて、首を左右に振る千冬。だがしかし、生徒一同の興味は別の部分へ注がれた。

「ちよつと待って、2人とも、名字は織斑？」

「つてことはまさか、2人は家族か、それとも親戚！？」

「真相はどうなの、織斑君！」

当の一夏は目を見開いていた。

自分の名前は既に何度もニュースで流れていたし、姉も世界的な有名人。名字の一致など、とつくの昔に判明していたもの、と、彼はそう考えていたのだ。

「いかにも、織斑先生は俺の姉だよ」と、当たり前のように彼は返事をした。

そうして、彼を二回目の不意打ちが襲う。こちらは一夏には予想外であったが　大歓声が、否応なしに彼の耳を覆ったのだ。

慌てて耳を塞ぐも、どうやら被ダメージを防ぐことはできなかったらしい。頭に、金属音のような余韻が響く。

「五月蠅いぞ、静かにしろ！」

こういった状況には慣れていたのでだろう、千冬は特別身構えるでもなく、教室中に響く声でそう言った。

威圧感を感じたのか、歓声は一瞬でやむ。

「別に興味を持つなどは言わん。だが今はホームルームだ。そういう話は休憩時間にやれ！」

そりゃないよ。自分の身が売られたということに即座に気付いた一夏だったが、残念ながら声に出して反論することはできなかった。千冬の言葉で納得したのか黙った生徒達を前に、千冬はようやく仕事を　担任としての　を始めた。

1 番最初の休憩時間

当然のように、クラスメイトの女子達のほとんどが、一夏の元へ寄ってくる。

勿論浴びせられようとしたのは飽和しきれない量の質問だったのだろう。しかし彼は、それを「ちよつと待って」とジェスチャーで牽制した。

「実は、知り合いがうちのクラスにいるらしいんだ。出来れば、そ

つちと挨拶してからでいいかな？ 大丈夫、逃げ出したりはしないから」

そう言っつて、極めて紳士的に質問を止める。それから席を立ち上がって、クラス中を見回す。

目的の生徒は、すぐに見つかった。何せ目が合ったのだ。

ということは、あちらも自分を認識しているはず。半分の確信ともう半分の不安をもって、一夏はその知り合いに声をかけた。

「 篤、久しぶり」

「 ああ、久しぶりだな、一夏」

不意に、辺りの空気が静まる。それで一夏は、周囲がこちらを見つめていることに気付いた。

「 ここじゃなんだし、ちよつと廊下で話そうか」

篤の側も居心地はそこまで良くなかったのだろう。二つ返事了解のを得て、2人は廊下へ出ていった。

廊下に、人の姿は見当たらない。

ふつう、学校の廊下といえは休憩時間は行き交う生徒で騒然としているものだ。少なくとも、一夏の頭の中ではそういうものだと認識していた。その「ふつう」の考えからしてみれば、今の廊下は非常に静かだった。

ま、初日ならまだ友人も少ないだろうし、他のクラスは今頃中で親睦を深めているんだろう。そう考えると、今の自分達は妙に浮いている。

とはいえ、別に苦になるといったわけでもない。というか、一夏からしてみれば、男子である時点で自分は浮いているのだ。既に振り切って浮いているのであれば、これ以上「普段なら浮いて見られるような行動」をしようと、大気を突き抜けるような浮上はしないだろう。

一通り周囲に気を配ると、一夏は知り合い 幼馴染の、篠ノ之 篤 の方に直った。

「 いや、あの人繋がりがあるからここに入学するとは思ったけど、

同じクラスになるとは思ってたよ」

「まあ、な。それより、自己紹介も途中で切れたというのに、よく私だと分かったな？」

「当たり前じゃないか、そもそも篤、昔の姿をそのまま大きくしたように見えるよ」

特に、髪型とか。

長いポニーテールは彼女のトレードマーク、それが一夏の認識だった。

人が他人を見分けるとき、3割ほどの部分は髪型を重視するらしい。そこがそっくりで、更に纏う雰囲気も似ている。最後に会ったのは小学校の頃だが、一夏としては間違えようもなかった。

「あ、そうそう。剣道、全国優勝おめでとう」

「何故知っている!？」

「いや、どうしても何も……何せ全国、しかも優勝者は見目麗しい少女とくれば、いろんなメディアで取り上げられる」

「み、見目麗しい?」

あくまで一夏はあたりさわりのない世間的な評価を言ったまでだが、勿論篤はそんなことを知れるはずもない。

そして、一夏もそれを説明はしない。彼らの間に一つ、勘違いが生まれた瞬間だ。

最も、今のところは些細な勘違いである。

「さて、そろそろチャイムも鳴っちゃうから、教室に戻ろうか」

「う、うむ! そうだな、そうするとしよう!」

少なくとも、一夏にとっては、だが。

やけに上機嫌な篤に首を傾げつつ、一夏は教室へと戻っていった。学校中にチャイムが鳴り響いたのは、2人がちょうど自身の席に着席した直後だった。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱した場合は、刑法によって罰せられ」

教科書の内容を、真耶はすらすらと読み上げていく。

確かこれは、5冊ほど支給された教科書のうち2番目に分厚い教科書の8ページ目に掲載されている内容だったはず。

一夏はと言えば、副担任の言葉を右から左に流しつつ、頬杖をついて欠伸を噛み殺していた。

法律に關与する部分は、ISの授業であろうとふつ々の公民の授業内容とそこまで変わりはない。そして内容も基礎の基礎だったので、ノートに文字を書き込む気すら、彼にはなかった。

「……織斑君、授業のノート取らなくて、大丈夫なの？」
不安げに、傍の席に座っている女子が一夏に尋ねる。

「ああ、うん。ここの内容は俺が初めてこれを勉強した3年前と一緒にだからね。大まかな内容は覚えてるし、ノートを提出しろって言われたら昔書いたやつをそのまま提出する」

遠回しだが、一夏はこの授業を受けている必要はないと宣言したのだ。自然、彼に話しかけた女子からは苦笑いが漏れる。

「あ、でも、山田先生の授業はかなり分かりやすいと思うな。教えるのがうまいっていうか、そんな感じ」

そして、再び一夏は欠伸を噛み殺す。

せめてノートを取っているポーズだけでも見せればいいのに、一夏はそれすらもしない。

どうも、その姿は真耶には、「お手上げ状態」であると映ったらしい。

「織斑君、ここまでで分からない所はありますか？」

とは言え、真耶も一夏を攻める気はなかった。

そもそも入学はかなり唐突に決定したことだし、彼は今までにISに関して触れることはなかった、と、そう思い込んでいたのだから、仕方のないことだ。

最も、彼の姉である織斑千冬に、一夏のことをちゃんと聞いていたのならば

「いえ、大丈夫です。この教科書だったら、一応全部覚えています」

「は、はい……そうですか、それならよかったです」

というような会話と、その後の気まずい沈黙は発生しえなかつただろうが。

「それならノートをとらんか、馬鹿者」

沈黙を破ったのは、教室の隅で待機していた千冬だった。

再び頬杖をついた一夏の背後に忍び寄り、強烈な出席簿アタックが炸裂する。

衝撃で、一夏の掛けていた眼鏡がずり落ちる。

「痛いです、織斑先生」

「お前が授業をサボタージユするからだ、馬鹿者。一度覚えた内容というのは分かっているが、お前はもう少し教師に敬意を払え」

眼鏡をかけ直しながら、渋々一夏はノートを取り出す。

別に、彼は持つてきていなかったわけではないのだ。ただ単純に、そのノートが授業用ではないだけで。

「織斑、眼鏡を外せ」

「え、織斑先生！？ それでは黒板が見えないのでは？」

真耶が不思議そうに尋ねる。千冬は、それに即答した。

「いや、この眼鏡橋は視力を矯正するものではないんだ。むしろ外の現象を無視するための装置、だな」

「？ ええっと、それはどういう」

「とにかく、眼鏡がなくても授業には何の問題もない」

「は、はあ……」

自身が眼鏡を掛けているせいだろうか、それでも真耶は納得が行かないようだ。

「織斑先生、本当に外さなきゃ駄目ですか？」

「当たり前だ、授業とは関係ないだろう」

「間接的には、関係ないってこともないですけど……」

すぱーん。小気味いい音が、またしても教室の静まった空気を支配する。

そう何度も何度も頭を楽器にされていてはたまらず、一夏はよう

やつと眼鏡を外した。

「それは預かっておこう、帰る前に渡す」

「精密機械なんだから壊さぬいでくださいね、『千冬姉さん』」
「分かっている」

『千冬姉さん』。呼び方を変えたということは、即ち教師生徒としてではなく姉弟として、学園での初めての会話だった。

言い換えれば、教師ではなく身内という、重要な願いだったということだ。

千冬は、現在ケースを持っていなかったので、仕方なくその眼鏡を自分で掛けた。

途端、少々のうめき声が千冬から洩れる。

「織斑先生、大丈夫ですか!？」

「問題ない。山田君、授業を続けてくれ」

うめき声が聞こえたには聞こえたが、千冬は特によろけるでもなく、再び教室の隅へ戻っていった。

「ええっと、どこまで話しましたっけ、確か」

そうして、再び真耶の声が教室に響くようになった。

2度目の休憩時間。今度こそ、一夏は女子達による膨大な質問攻めを捌くこととなった。

質問の内容は多種多様。「ISに乗れるのは、もしかして千冬の弟だからか」「ここに入学する前は、どこの高校を受ける予定だったのか」「千冬のプライベートはどういったものか」「男性IS操縦者として、立場をどう感じているか」「メールアドレスください」。質問内容は真面目なものが半分、ふざけているとみて間違いないものが半分といった具合だ。

その1つ1つに、一夏は丁寧に返答してゆく。「いや、有名操縦者の親族が乗れるというなら自分以外も乗れるはずだ」「そもそも

入学はせず、倉持技研という研究所で働く予定だった」「言ったら殺されるので、ずばらすぎて部屋は魔窟と成り果てているだなんて絶対に言えない」「元々の予定よりお金が入る点はありがたい」「アドレスは4つ持つてるけどどれがいい」。返答が的確なゆえにひとつの質問に裂かれる時間が多くなる。

これは、次の休憩も質問攻めかな。一夏がそう思った、ちよつどその時だった。

「ちよつと、よろしくて？」

背後から声がかかる。質問の1つと受け取るには、多少不安なもので、一夏は数瞬だけ振り返ることを躊躇う。

しかし、ここでケンカ沙汰ということもないだろう。そう判断し、結局振り向くことにした。

彼の振り向いた先にいたのは、金髪の髪の手を持つ少女だった。

一夏はその姿に、多少心当たりがあった。

「ああ、ええつと……セシリアさん、だから……あ、もしかして、イギリス代表候補生のオルコットさん、かな？」

「あら、自己紹介はきちんと聞いてらしたのね？」

「調べれば、すぐに情報が出てきたからね。一応、同い年の代表候補生ぐらいは全員調べておいた。まさか、本当に同じクラスになるとは思わなかったけれど。専用機ブルー・ティアーズ、イグニッション・プランのティアーズモデルの一種、だったかな」

イグニッション・プラン。欧米連合の統合防衛計画。イギリスは参加国の1つであり、ティアーズモデルはまさきに実用化の目処が立ったモデルだ。少しばかり調べれば、情報は簡単に出てきた。

「やはり……男性だというのに、何故そこまでISに詳しいのですか？ 確か、先程の授業でも、既に内容を理解しているとおっしゃってましたわよね？」

しかし、「少しばかり調べれば」は、あくまで一夏感覚に過ぎない。一般人の思考からすれば、5冊分の教科書をいきなり渡されれば、他のことを調べている時間などないというのが常識なのだ。

「いやほら、渡された教科書のうちいくつかは、既に知ってる内容だったからさ。本来そこに使ってた時間を予習に使ったんだ」

「なるほど、そういうことでしたか……しかし、男性である貴方が、何故ISの知識を元から蓄えていたのですか？」

「男だから女だからって差別する必要、ないんじゃないかな？ ISに乗れるのが女性ってだけで、別にIS関係者を女性固めする必要はないし」

一夏としてはごく自然に出た言葉だったが、しかし、周囲の生徒はおかしく感じたようだ。

「しかし、乗れるのが女性である以上、中心人物は女性であってしかなるべきなのではないですか？」

内心一夏は少しだけ面倒臭さを感じる。

ISに女性しか乗れないことが発覚してから、急激に広まった女尊男卑。ともすれば街中で男性が女性に小間使いのように扱われるこの社会では、あくまで女性主義という考え方をする人間がかなり多い。

そして、世界最強のIS搭乗者でありながら別に男女差別を行わない姉を持つ一夏は、その女尊男卑の社会的な流れとは相いれぬようなきらいがあった。

「乗るのは確かに女性さ。けれど、それには優秀な技術者と研究員がいてこそだ。詰まるところ、ISに乗れる以外に男性と女性が差別されるべき部分は、何一つない。少し言葉が悪くなるけれど、セシリアさんは極端に考えすぎだよ」

確かに、それは正論だった。

ISに乗れる女性がいる、それだから女性が優遇されている。しかし、それに便乗して針小棒大に自分の権利を語る女性も多々いる。だが、男性には不可能な国家貢献をする可能性がある女性とそうでない女性をより分けることは不可能であり、セシリアの女性優遇主義もまた真理のひとつだ。

自身の持つ正論をチャンバラさせてもお互いの争いを加速するだ

けである。が、しかし、今この場において主流なのは、明らかに女性優遇主義だった。

「織斑君って、変わった考え方するんだね」

「あ、でも、私、自分なりの考え方を持つてる人って好きだなあ」
そんな声が周りから聞こえる。

セシリアからしてみれば、予想外な展開であった。

そもそも、彼女は「ISを操縦できる唯一の男性」がどのような人物であるか、それを確かめようと声をかけたに過ぎない。

自分の求めていた知性のかけらは見ることができたとはいえ、周囲は自分と同じ考え方を持った人間ばかり。

自分の考えが間違っているのではない、という後押しを受けているが、逆に自分からは引き下がれない。彼女を襲っているのはそういう状況だった。

「まあ、自分の考えかたというより、かなりの男性の代弁でもあると思うけどね。そもそもこの意見は去年小論文コンクールに出したものだし、一応自信はあったけど賞与はなかったから、やっぱり女性には優遇されて然るべきっていうのが社会の考え方と見て間違いない、かな」

自分に味方はいないことを察したのだろう、一夏はすぐに引き下がった。

退くことができなかったセシリアにとって、相手の退陣は願った
り叶ったりだ。

だった、のだが。

「逃げるのですか？」

腑に落ちない様子で、セシリアは着席しようとする一夏に言葉を
投げかけた。

びくりと一夏が反応したことを確認し、セシリアは更に続ける。

「まだ、わたくしは貴方の意見を聞き終わっていないのに」

一夏は、初めてむっとした表情になった。

「逃げるんじゃない。今から話すのは、時間が足りなさすぎる」

時間？ セシリアは時計を確認してみるが、まだ休憩時間は4分ほど残っている。

2人とも、既に次の授業の準備は終わらせてあるようだった。多少引き伸ばす時間ぐらいいは、あるのではないか。

しかし一夏は、小さく首を横に振る。

「予め話す相手が誰だか分かってるなら、一番適切な言葉を吟味した上で話すこともできたんだろうけど。生憎俺は、言葉選びは苦手なんだよね、昔から。それに、こっちは、織斑先生が出席簿で止めてくれるだろうけど、昔から、俺は言い争いだと熱くなりすぎるんだ」

言うだけ言って、今度こそ一夏は着席した。

なにやら不完全燃焼な感情を残しながらも、少なくとも彼に対して失望するのはまだ早い、ということだけは理解できたため、仕方なく自分の席へと戻、

「言い忘れてた！」

ろうとした時、急に一夏が起立した。

「セシリアさん、お願いがあるんだけど！」

その、先程までとはあまりにも違うテンションに、思わずセシリアもたじろぐ。

「な、なんでしよう……？」

自然、狼狽した言い方で返事をするセシリア。

そして次の一夏が放った言葉はいえば、彼女を更に混乱させるには十分すぎるものだった。

「ちょっと、付き合っただけ欲しいんだ」

2 信念通しは優柔不断

「いきなり何を言っているんだ、お前はあつ!?!」

啞然とするセシリアを置いてきぼりにして、そう大声の反論をしたのは箒だ。

「へ? 俺なんか、まずいこと言ったか?」

「まずい以前のっ! 問題だろうがっ! 何、白昼堂々告白してるんだ、お前は!」

「告白?」

きよとん、と首を傾げる一夏。嘘偽りなく、真剣に何のことかわかり兼ねているらしい。

箒は怒鳴り声で続ける。

「さっきの発言のどこが告白じゃないと言っただ!?!」

「……?」

あまりにも、一夏と箒の温度差は違った。

正確に言えば、一夏及びセシリアと、周囲の女子全ての温度差が違っ。

(一夏は箒の言っていることに、セシリアは突然の告白に、という違いこそあるけれども) 状況が飲み込めない2人に対し、箒は怒鳴りそのほかの女子達はわいのわいのと盛り上がっている。

そして、このあまりの落差に裏があることに気付いたのは、今の所最も冷静な一夏だった。

箒からセシリアに向き直り、一夏は尋ねる。

「なあ、セシリアさん」

機械じみた動きでセシリアはどうか動きだし、それから数秒時間置き、ようやく「なんですの?」と、出来るだけ平静を保った声で答えた。

「さっき俺が言ったこと、セシリアさんはどう受け取った?」

微弱な電気に打たれたように、セシリアの身体が跳ねた。

あまりにも直球過ぎる。いや確かに、自分の容姿に自信がないというわけではない。不健康そうであったり、見た目が醜かったりしては家の名が落ちると、ISに関しての実力のみでなく姿に関しても努力はしてきたつもりだ。一応、ナンパだとかの類ではなく、正式にお付き合いをと告白されたことも何度かはある。それでも、ここまで単刀直入に言われたのは初めてではないか。このような内容を頭の中で5秒に10回ほどは反芻し、それで彼女はようやく、当たり前障りのない答えへとたどり着いた。

「ええと、その、お気持ち嬉しいのですが、ほら、あー、わたくしと貴方は、今日初めて出会ったわけですし、ですから」

セシリアのその返事を聞いて、一夏はようやくと確信を持った。

「分かった。うん、ごめん、確かに付き合っって言葉は、そのまま言えば告白の意味になったかもしれないや。謝る、決してそういう意味で付き合っって言ったわけじゃない。ただ単純に、『本の知識程度でなら理解してるつもりだけど、機動に関しては素人だから練習に付き合っってくれ』っていう意味で言っただけで」

「だったら、省略せず最初からそう言わんかあ　っ！」

箒が、一夏に後ろから思いきり突っ込む。サンドバッグよろしく箒の攻撃を受け流すことなく喰らい、一夏は危うく意識を刈り取られかけた。

「いや待て箒！　付き合うの意味といえば『行動を共にする』だろ！？　そもそも俺はさっきまでセシリアさんと何の関係もなかったんだぞ！　人の内面も見ないで好きになっただまるか！」

「今度国語辞典を調べてみる！　第一項目に『交際』と出てくるわ！　確か小学校の時も主語を省くなと何度も言ったよな！？　私は確かに言ったぞ！」

「いや、家にいる時千冬姉さん相手には大体通じたから、つい癖で」といつか、意味が2つある単語でどちらか分からないなら聞けばいいだろ！」

「ならば試してみようではないか、ちょっと付き合え！」

「何に？ 買い物か？」

「このっ……お前も聞いていないではないかっ！」

「ええ、だって箒が恋愛という意味で付き合ってくれなんてこんな場所でグハッ　　！」

再び箒の一撃を喰らい、一夏はその場に崩れ落ちる。

周囲の生徒が「なーんだ、つまんないの」「あーあ、折角本のネタになると思ったのに」などと口々に言いながら退散して行く中、セシリアは理解した。

織斑一夏は、あらゆる意味で今まで見てきた男性とは別人である、と

「それではこの時間は　ん、織斑はどうした？」

千冬が初めて教鞭を振るうことになったその時間の、彼女の第一声はそれであった。

おずおずと箒が手を挙げる。

「篠ノ之か、あいつはどこにいる？」

「……その床で、のびてます」

あまりにも予想外の返事が来て、思わず一瞬呆れ顔になる千冬。

ここで先程一夏から没収した眼鏡を掛けていれば更に貴重なシーンとなり得たが、どうやらその眼鏡は現在、真耶が所持しているようだった。

「誰がやったんだ？」

「……私が、さっきの休憩時間に。ちょっと、いざこざで……」

一夏の起こすいざこざとあって、千冬はある程度その内容は予測できた。

どうせ、言葉足らずと朴念仁が原因だろう。細かい内容まで言い当てることは不可能だったが、原因はぴたりの中だ。

千冬はセシリアの机と一夏の机の中間点辺りで寝そべっている一夏に近付き、そして彼を軽く持ち上げた。

そして、本人の席まで楽々と運び、すっとと着席させる。

「ん……あれ？ 織斑先生」

「相手の身体能力が高いとは言え、女子の急所狙いでもない攻撃で気絶してどうするんだ、お前は」

着席時の衝撃で、一夏は目を覚ました。

「そこは箒の身体能力の高さを褒めるべきところであって、決して被害者を叱責する場面じゃないと俺は思うんですちよつと待ってください出席簿を振り上げてどうするつもりですか織斑先生！？」

「それ以上屁理屈を言うようなら、これをこのまま振り下ろす」

自身の姉の攻撃力を知っているが故に、そして更に自身の防御力の低さも知っているがために、一夏は黙らざるをえなかった。

分かりやすい実力格差を振り撒きつつ、千冬は教卓へと戻る。

「さて、今度こそ授業を始めるが その前に、ひとつ決めなければならぬことがある。織斑、何だその手は」

「俺以外、全員推薦します」

クラスのひとつだが、一夏の提案が何のことか理解しかねて首を傾げる。

「名前すら言えないのであれば却下だ。さて、決めなければならぬことだが、織斑、たとえ名前が言えたからといって、理由もなしの推薦は却下だ」

再び挙手した一夏を、千冬は呆れ顔で眺める。

一夏は急にきりつとした顔付きになると、同時に反論を開始した。「理由ならあります」

「何？」

「俺が受けたくないからです先生すぐ肉体と会話しようとするのはやめるべきだと思っんですがっ！？」

今回は、一夏の制止も効かず、というか聞かずに千冬の出席簿は振り下ろされた。

角部分と頭が勢いよく激突する、痛烈な音がクラス内に響く。

「で、まともな理由で推薦できる人間はいるのか？」

「つつ……まあ、2人ぐらいは」

なら言ってみろ、と言いかけ、千冬は視界に慌てている真耶を捉えた。

どうやら姉弟で話しすぎていた、ということに気付き、弟の話の続きを無視して自身のすべき話を開始する。

「さて、それではだが。今から、クラス代表を決めてもらう」

一夏が手を挙げる。千冬は無視した。

「その名の通り、クラスの代表となり様々な行事で先頭に立つてもらうことになる。聞こえはいいが、総括して言えば雑用だな」

クラス女子達の間で、空気が冷え込んだ。一夏以外は全員女子なので、平たく言えばクラス全体の空気が冷え込んだ。

一夏の右手は天井と垂直になるまで綺麗に伸ばされたが、これも千冬は無視することにした。

「さて、それではこの時間の間に決定してもらうぞ。自薦他薦は問わない、意見がある奴は手を挙げる。織斑」

「はい、それじゃあ箒とセシリアさんを推薦で」

千冬があからさまに目を細めた。

「理由を言ってみろ」

「セシリアさんに関しては、言わずもがな代表候補生でリーダーシップを執るのに相応しいと思うためですね。箒に関しては、まあ武術のたしなみがあるので、雑用や威圧に向いているかと……」

今回は正当な理由がついているため、千冬には反論することができない。

さて、それではどうするか。彼女が考え始めようとした時、箒が思いきり立ち上がり反論した。

「ちよつと待て！ それは暗に私を体力馬鹿と言っているのではないか！？」

「馬鹿とは言っていない。ただ体力がほかに比べて特出していると

「うただけだぞ」

被害妄想とは悲しいね、と一夏が首を横に振る。

「それなら、織斑先生！ 私は、私は一夏を推薦します！ 広告塔としての役目は十分ですし、こいつはデスクワーク関係の雑用なら非常に優れています！」

箒に続け、周囲の女子も次々と「わたしも織斑君かな」「じゃあ、あたしも同じく」「一夏を推薦してゆく。

しばらくして、2度ほど千冬が手を叩く。教室はそれで静かになった。

「さて、他はいないか？ いないのであれば織斑、篠ノ之、オルコットの3人で決めてもらうことになるが」

誰も声は出さなかった。

元より、クラスのほとんどの女子は一夏を他薦する方向で確定している。

一夏も、最初から自分が選ばれることは（クラスメイトの女子の嗜好きを見て）確信していたので、とりあえず他人を候補に挙げる事ができて満足だった。この男は、適当な理由をつけて他の立候補に役目をなすりつけようという、実に極悪非道で後ろ向きな考えをしていた。

唯一最初から自薦する予定だったセシリアとしても、実力としては最も高い自身がクラスメイトの大多数に選ばれなかったことに多少の不満は持っていたとはいえ、一夏について多少（少なくとも、頭の回転の早さ程度）は認めないわけにはいかなかったため、とりあえず声を荒げて推薦の内容に反対はしていない。

唯一不満を持っているのは、多分捨て駒として扱われたということを理解している、箒程度だった。その箒も、受理されてしまったからでは反論のしようもない。

「さて、ではこの3人の中から選ぶこととしよう。決定方法は

そうだな、多数決では結果が目に見えているので IS学園らしく、模擬戦、という形を採るぞ」

模擬戦、という言葉聞き、一夏は内心思い切りにやけた。

この決定方法であれば、自分は問題なく「自然な辞退」をすることが可能である。

うまい具合に転がってくれたものだ。しかし、その一夏の考えは、千冬の次ぐ言葉であつさり打ち砕かれることとなる。

「ちなみに、当然のことだが、辞退したいがために手を抜くなよ。私が手加減していると判断した場合、クラス代表の数倍の仕事を与えてやるから、そう思え」

威勢よく返事したのはセシリアのみである。筈は諦めたような雰囲気、一夏は冷蔵庫のプリンがなくなつたかのようなシヨックの表情をあらわにしていた。

してやったり。千冬的心情を表すと、おおよそそんな具合であつたろう。一夏の考えは見事に看破されていたのだ。

「織斑先生」

負けじと一夏が挙手する。

「何だ、織斑」

「他薦された人間より自薦する気概のある人間のほうが円滑にことが進むと思うのですが！」

「黙れ。そもそも全員他薦だ」

「いえ、ですけど！ セシリアさんは、最初から自薦する気はあつたかと思えます！」

「残念ながら、今からそれを確認する方法はないな」

一夏からさつと血の気が退いた。

墓穴を掘っていたのだ。セシリアを自分が推薦しなければ、少なくとももう少し食い下がることは可能だった、その結論に至つてしまったのである。

「では、試合は一週間後とする。各自準備を整えておくように。さて、授業を開始するぞ」

IS武装の基本的な知識を話し始める千冬だったが、既に知っている内容の上に放心状態である今の一夏には、それを聞くだけの気

力は残っていなかった。

そして、時は昼食時間となる。

女子達のコミュニケーション能力は非常に高いもので、既にクラス内ではいくつかのグループが出来ていた。

片手で数えられるような回数 of 休憩時間の数、しかもそのうち1度は自分のところに来ていたはずなのに、どうしてももうグループが出来上がってるんだ？ そんなことを考えつつ、一夏は他のほとんどのグループの誘いを蹴り、学食でひとり食事をしていた。

最も、食堂であるために1組（一夏の在籍するクラスである）以外の生徒が大量に押しかけて来る、半パニック状態を気にしなければ、という前提の「ひとり」ではあるが。

このようなことがないように等に同席を頼んだのだが、彼女にはにべもなく断られてしまったのだ。

初日から悪印象を持たれるわけにもいかず、ある程度話を聞き取りながら、一夏は口の中が空になったときに質問のいくつかに回答する。「ながら食い」という言葉があるが、この場合答えながら食い、である。

最も、おおまかな質問の傾向は大体一致していたので、一夏としては特別心労の溜まるものではなかったのだが、ちょうど味噌汁の半分を啜り終わったところで、空気が変わった。

「同席してもよろしくて？」

聞き覚えのある声があった方向を、一夏の視線が捉える。そこにはお盆を持ったセシリアがいた。視線の高さの関係で、料理が何かまではわからない。

「ん、別に大丈夫。特にセシリアさんには相談したいこともあるし反対側の席へと座るよう促すと、他の女子を掻き分けるようにセシリアは机に近づき、着席した。

自然、それまで同席を断られていた他の生徒たちは面白くなさそうな顔になるが、一夏はとりあえず「知り合いなので、すいません」

という理由で突き通すことにした。

そして、一夏の視線が真剣見を帯びたものに変わりながらセシリアの方向を向いたので、ようやく女子達も各々散らばって行った。

周囲の女子がいなくなったと同時に、一夏が軽く吹き出す。

「？ どうなさったのですか？」

「いや、ぞつとしないなあって。噂好きな女子のことだから、どうせオルコットさんと俺が今日初めて知り合っただってことも知ってるんだろうな、と思ってたからさ。この後どうという言葉で追ひ払おうって考えてたら、予想外に皆あっさり引いちゃっただろ？」

「……まさか、わたくしをダシにした、ということでは」「バレた？」

間髪入れずに返されて、セシリアは多少へそを曲げた。体よく利用されたというのは、あまり気分のいいものではない。

見れば一夏の真剣見を帯びていたように見えた視線、そして雰囲気は、既に跡形もなく消え去っていた。

切り替えが早いのか、単純に悪戯が好きだけか。悩んでいると一夏が問い掛けてくる。

「それで、用事って何だ？ 日替わりパスタのタリアテツレなんて持ってるんだから、昼食を相談したいわけじゃないだろ？」

小さくひとつ咳ばらいをして、セシリアは無駄な思考を省いた。

「ええっと、2つの用事がありますが、時間がないのでとりあえず片方だけでよろしいでしょうか？」

「うん 女尊男卑の話題を聞かせる、かな？ それとも、付き合っ話への正式なお断り？」

「……断ると、もう分かっていたのですね」

珍しく、セシリアが申し訳なさそうに縮こまった。

「そりゃあ、仕方ないでしょ。まさか俺も、一週間後にいきなり、教えを乞った相手と対戦することになるとは思ってたよ。セシリアとしてもここで代表候補生としてアピールしておかなきゃいけないわけだから、結論は『無理』になるよな」

既に全てが見透かされていたことに、セシリアは啞然とする。初めて会話をした時に要領のいい人間だとは理解したが、まさかここまでとは考えていなかったらしい。

「それじゃあ 模擬戦が終わった後で、もう一回お願いしてもいいかな」

「ええ、それであれば多分！」

その答えで納得したらしく、一夏は一度頷いた。

「それじゃあ、とりあえず1人でどこまでできるか試してみるよ」
それで話はずいた、と一夏は判断し席を立つたが、しかしセシリアは1つ納得がいかないことがあり、一夏を呼び止めた。

「何？」

「いえ、確かクラス代表になることには乗り気ではなかったのに、やけに張り切っているように見えたので……」

一夏は振り返る。そして、当然のようにこう言った。

「セシリアさんが自分の実力にあぐらをかいているようであれば、手抜きでもいいかなとは思ったけどね 本気の相手に本気で答えがないなんて、恥ずかしいだろ？」

今度こそ、一夏は去ってゆく。

その後ろ姿に見とれていたことをセシリアが認識したのは、一夏の姿が完全に見えなくなっただけだった。

「……不思議な、方ですわね」

悪い意味でも、良い意味でも。

セシリアが一夏の評価を書き換えていた頃。

篠ノ之箒は、クラスで頭を抱えていた。

（せっかく一夏が昼食に誘ってくれたのに、なぜ蹴った!? またとない機会であったというのに!）

抱えた頭の中で彼女が考えていたことといえば、このようなこと

の際限ないループである。

広げてある弁当には一切口が付けられておらず、ともすれば何か病に罹っているのではないか、と周囲が心配してしまうほどであった。

ある意味、箒の意思と反した行動というのは、長年治らない病のひとつと言えなくもない。

「どうしたんだ、箒？ 弁当があまりにまずかったとかか？」

ふと声が出た方向を見ると、そこには一夏がいた。時計を見れば、既に休憩時間に入ってから20分以上は経過している。既に昼食は食べ終わっているのだろう。

「ちよつと失礼 ん、別にまずくないじゃないか」

そのぐらいは、箒も分かっていた。味見ぐらいしたのだ、まずいわけがない。一夏が食べようと味覚が変でなければ あれ？

彼女は、気付いた。

「一夏」

「ん、何だ？」

「その……私の弁当、食べたのか？」

「ああ、ちよつとその肉団子を。肉団子って言っても、半分ぐらいが野菜で作られてんのかな、これ？ 結構美味いぞ？」

先ほどまで落ち込みの台詞がループしていた頭に、今度は「美味しい」という台詞がループする。

「本当か？」

「嘘なら、今頃歪んだ顔してるよ」

箒が顔をあげる。

一夏は苦々しい顔をしていた。

「まずいのではないか！」

「いや、冗談冗談」

顔を戻して、それからからからと、愉快そうに一夏は笑った。

「そうそう、用事があるんだった。なんか、放課後に俺が眼鏡返してもらおう時、箒も一緒に来いだってさ」

「眼鏡を返してもらおう時に？ なぜ私が呼び出されるんだ」
「さあ、知らない。うちの姉上様々は、お人遣いが荒いからな」

3 あの方は、幼馴染の位置を獲得しました。

そして、数時間後。

箒は、立ち尽くしていた。

場所は教室ではなく、職員室の前。不審に感じた数名の教師が話しかけるも一切反応を見せず、既に匙を投げられた状態である。

発端は、数十分前に遡る。

入学初日の授業　IS学園は国立高校、そのうえ講義内容も非

常に濃密であり、時間が惜しいと初日から授業が詰め込まれているがすべて終了し、一夏は自身の眼鏡を返してもらったために、箒はなぜだか一緒に呼ばれたために、2人は職員室へと来ていた。

「失礼しまーす、1年1組の織斑一夏ですが、織斑先生はいますかー？」

コン、コン、コン、コン、と、4回ノックをしながら、一夏は目的の人物を呼び出す。

10秒ほどで、千冬は現れた。

「来たな。篠ノ之も　よし、ちゃんというな」

「織斑先生、俺は分かりますが、なんで箒も一緒なんですか？」

「いや、2人ともに、ついでの用事があるからな。……おっと、その前に眼鏡を返しておくか」

千冬のスーツの胸ポケットから、一夏が数時間前まで掛けていた眼鏡が取り出される。

一夏はそれを受け取ると、レンズに傷がいつていないかを細かく確認し、自身の眼鏡ケースに入れた。

「掛けなくていいのか？」

箒が尋ねると、一夏は「ああ、箒は知らないんだっけ」と返し、それから眼鏡を再び取り出して、レンズの内側を箒に見せた。

「……む？　何だ、これは……？」

レンズの裏側には、大量の数字とアルファベットが映っている。アルファベットは、AからFまで。

「見ての通り、これは小型のディスプレイ。ほら、目を近づけるともう少し沢山字が見えてくると思うぜ」

一夏に促され、箒はレンズギリギリまで目を近づける。

すると、レンズは瞳に、膨大な量の文字列を焼き付けてきた。あまりの情報量に、思わずよろけそうになる箒を、一夏が支える。

「ごめん、慣れてないとそうなるよな。ともかく、こいつは一種の演算補助装置みたいなもんだよ。ちなみにくれた人は、まあ、箒の好いてない相手だけど……」

語尾が尻すぼみになる一夏の言葉で、箒は、この眼鏡を一夏にプレセントした人物が誰であるかを理解した。

しかし、箒がその人物との回想に入る前に、千冬が声を挟む。

「ともかく、授業で私が一夏からこれを取り上げた理由も、どこのつまり一夏が完璧に授業を無視するポーズを取っていたため、というわけだ。さて、では織斑、篠ノ之。今から呼んだ理由を説明するぞ」

千冬が、今度はシャツのポケットから何かを2つ取り出し、一夏と箒の両方に渡す。

2人とも受け取ってそれが何であるかを確認すると、どうやら鍵のようだった。

「ああ、そういえば、私は寮の鍵を貰っていませんでしたね。だから呼ばれた、と」

自分が呼ばれた理由を箒はやつと理解するが、織斑の名字を持つ2人は何やら渋い顔をしていた。

「それだけではないのだが……まあ、いいだろう。織斑、何か不都合でも？」

「織斑先生。俺は寮に入るのは一週間後と聞いていたので、貴重品の準備が一切できていません」

「生活必需品の類であれば、私が適当に漁って持ってきてある。着

替えと携帯の充電器ぐらいだが」

千冬が言い終わると、間髪入れずに一夏が「足りません」と言い返す。

「部屋のPCはまた今度の大型連休にでも持ってくるとして、少なくともノートPCがないと。ちよっと、今から取りに行つていいですか？」

溜息をついて、首を横に振る千冬。横の箒を差し置いて、一夏は更に言い返す。

「駄目なら、入れてある棚の鍵を渡すんで、織斑先生が取りに行つて下さい。人に渡さなきゃいけないデータが多少入ってるんです」

そして、ズボンのポケットに入れてあつた小さな鍵を、千冬に差し出す。

「急ぎ……ということとは、あいつ関係か」

「そうです。多分専用機が届くまで自衛手段がないからこそ、計画の前倒しですよ？ 本当なら、このぐらい予想して自分で持つてくるべきでした、ごめんなさい」

小さく、千冬が溜息を吐いた。

「仕方がない、元はと言えば大人の事情に無理矢理付き合わせた結果だ。全く、この年になつて高校生の使いっ走りになれるとは、な」
再び一夏が頭を下げ「ごめんなさい、よろしく願います」と言う。

差し出された鍵を先ほどまで寮の鍵が入っていた方のポケットに入れつつ、「さて、ではもう一つだな」と千冬は続ける。

ようやく自分の介入できる話になつたと感づき、一夏ではなく箒がそれに返事をした。

「部屋の番号 ですよ？」

「その通りだ。防犯の目的上、鍵番号は鍵と一緒に付けられないことになつているからな」

言いながら、最初から左でのひらに握っていたのであろう小さな紙を、一夏と箒のそれぞれに渡す。

箒、一夏の順番で紙は受け渡された。広げた箒が、一夏に「お前は何号室だ?」と尋ねる。

「ええと、5201号室かな?」

箒が一夏の手元を覗き込むと、確かにその紙にはデジタル数字で「5201」と書かれていた。

しかし、千冬が指摘する。

「逆さ向きだ。第一5201号室なぞうちの寮にはない」

「あ、そうなのか。よっと」

くるり、と180度、一夏は紙を回転させる。

「ふむ 1025号室、だつてさ。ちなみに、箒は何号室だ?」

今度は一夏が箒に尋ねる。しかし、箒はなぜか硬直して動かない。

「ん? どうしたんだよ、箒?」

箒の手元で広げられた番号の書かれている紙を見ようと、一夏は箒の肩に手を掛け覗き込む。

「ひゃ、ひゃわあっ!?!」

「おい、箒!? あぶ、うわ、どうした!」

一夏が覗き込んだその瞬間、箒は過剰反応したかと思うと、思い切り一夏を吹き飛ばした。

どうにか転ばないようにバランスを取った一夏が再び箒を見ると、彼女は紙を今一度広げ、また完全に動きを止めていた。停めていた。

「……うーん、なあ千冬姉さん、箒、これどうなってんだ?」

「それは 後で、分かるだろう。それより、私はもうノートPCを取りに行くぞ。棚は上から2段目だな?」

「ああ。一応1段目3段目もその鍵で開くけど。開けてもいいけど、中の紙を汚したりしないよね」

「分かっている」

最後に箒に何やら耳打ちすると 悪戯っぽい笑みを、微かに浮かべていた 、再び千冬は職員室へと入っていった。

「箒? 箒ちゃん、箒さん、篠ノ之さーん! ……駄目だな、反応しない」

言葉には反応しないで、紙を見ようとしたら握り潰される。どうしたのか……。千冬がいなくなった後も一夏は悩んでいたが、数分経つと諦めたようで、どうせ後少しすれば復活するだろう、という不確定な考えと共にその場を去った。

それから、数十分。箒が微動だにしなかったというのは、既に何人も教師が知る事実である。

箒が千冬に耳打ちされた言葉は「遅くても夏休み前には変わる、精々楽しむことだ」であり、箒の手元の紙に書かれた番号は「1025」。即ち一夏と同室であったが、その事実を現時点で知っている生徒は、もちろん箒のみであった。

さて、箒を置き去りにした一夏であるが、彼は今現在、指定された寮の自室にはいない。それどころか、1年生の教室に来ていた。

但し、1年生の教室と言っても、自身が籍を置いている1組ではない。彼が今来ているのは、1年4組であった。

当然、何の用もなしにこの教室に来たのではなく……目的を果たすため、一夏は現在、4組生徒のうち1人と会話していた。

「……本当に、この番号で間違いはない？」

「うん！ それにしても、どうしてあの人の部屋番号なんて？」

「知り合いなんだよ、確か初めて会ったのは6年前……だったかな？ とにかく、結構前ってことは確かだ。それじゃ、ありがとな！」

一夏の目的は、人捜しであった。

昔から様々な論文講演会やコンクールに参加している一夏は、その分交遊関係が広い。捜しているのは、その関係で知り合った人物である。

教室にまだ残っているのであれば好都合だったが、その相手は既に教室を後にしていた。故に、クラスに残っていた他の生徒を捕まえ、情報を聞き出していたわけである。

生憎、最初に捕まえた生徒は自身の番号しか覚えていなかったが、一夏とのコネを持ちたい（と言うより、単純に男子生徒に興味があ

る)その生徒は本日知り合った他の女子に又聞きで質問。何人かそれを繰り返して、結果として一夏が捜していた人物の部屋番号の特定に、いまさつき至ったのだ。

部屋番号を特定できた一夏は、その数分後には寮の、教えられた部屋の前まで来ていた。

最初にノックをするが、部屋の中から反応はない。

もう一度、今度は「おい」と呼び掛けながらノックする。やはり、反応はない。

もしかして、今は食堂にいるのか？ そんなことを考えつつ、一夏は部屋を離れようとする。

しかし、部屋の扉が開いたのは、一夏が食堂にむけて歩きだしたちようどその瞬間だった。

「誰……？」

声が聞こえて、一夏はすぐに振り返る。

今聞こえたのは、そっくりさんじゃなければ、確かに自分のよく知る人物なはず。果たして、扉のノブを握っていたのは、一夏の捜していた相手そのものだった。

髪は水色で内向き、そこまで長くない。一夏と似たような眼鏡を掛けており、瞳はどちらかと言えば垂れ目の部類に入るだろう。

「や。簪さん、久しぶり！」

「え……織斑くん？ あ、そっか……入学したんだから、そりゃあ、いるよね……」

名を、更識簪しんしきかん。小学校の頃には作文コンクールで、中学の時点では各地の大学の研究会や論文発表会で一夏と何度も顔を合わせている、彼の昔馴染みである。

「いることは知ってたから、初日のうちに挨拶しておきたくてさ」

「織斑くん……そういう所、本当にマメだよ……」

「後になって忘れるよりはいいだろ？ 日本のことわざでも、善は急げって言うじゃないか」

同じ学園にいる以上、会うことはいつでも出来るのだから、それ

ほど善というわけでもないのではないだろうか……？ 多少無理があるように思える一夏の考え方に、簪は少し微笑む。

「つつても、本当に挨拶だけなんだけどな。後2日入学式が遅ければ、香川にでも行っただけだ」

「別に私、うどんしか食べないわけじゃないよ……？」

「じゃあ、秋葉原にでも行けたんだけど」

「それは、土産物として、どうなのかな……？」

むむむ……と唸る一夏。最初は冗談を言うだけの予定であったのが、いつの間にやら真剣なおみやげ議論に変化していた。

「あれ……そういえば織斑くん、今日は眼鏡掛けてないんだね」

「ん？ あ、ああ。授業中には掛けてただんだけど、千冬姉さんに取りあげ喰らって、さっき返してもらったばっかなんだ。それから簪さんのこと捜してて、掛けるの忘れてた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5357z/>

IS書きなぐられた一夏は

2011年12月19日01時05分発行